希望を耕す

スターハウス・サミット

神戸芸術工科大学 学長
松村 秀一
Shuichi Matsumura

昨年の漢字は「熊」

帰宅後テレビのスイッチを入れると、京都清水寺の住職が大きな筆で「熊」の一文字を書いていた。二〇二五年は、毎日どこどこで熊が出たというニュースが流れる珍しい年であった。恐ろしい世の中になったものだ。

秋田で、岩手で、青森で、宮城で、山形で、福島で、北海道でと聞いて北だけかと思っていたら、奈良でも、大阪でも、兵庫でもと、結局日本中で熊の出没が相次いだ。ドングリが不作で云々と原因を聞けばそうなのかと思うのだが、それにしてもまるで全国の熊の間で打合せができていたかのように、日本中でこの現象が起きた。その同時多発性に改めて驚かされた。

同時多発性と言えば、昭和二十年代～三十年代に建設された古い住棟が保存活用され始めたというニュースが、全国各地の色々な県や市から届いた昨今の現象もそうだ。

日本がまだまだ占領下にあり貧しかった戦後の昭和二十年代に建った公営住宅など、ただのオンボロ住宅なので建替えてしまおうというのが少し前までの一般の感覚だっただろうが、どうやら時代感覚は変わってきているらしい。日本でも残り少なくなったこんな貴重な建物を取り壊すのはもったいないから、何とか良い方法で活用していこうよという意見が主流派になる、そんな感覚の時代に入ってきたようなのだ。

登録文化財のインパクト

このように古い公共住宅の保存活用が全国で同時多発する、そのきっかけになったことの一つは、昭和三十年代に供用開始されたUR都市機構旧赤羽台団地のオリジナル住棟四棟が、国の文化財として登録されたことのようだ。（関連記事：本誌二〇一九年十二月号の拙稿「文化遺産の保存活用」）　約六〇年経過したかつての公団住宅が取り壊されるどころか、文化財として保存活用されるというのだから、同様に古い集合住宅を保有、管理する全国各地の地方公共団体は大層勇気付けられたことだろう。

登録文化財になった住棟の活用方法の検討をUR都市機構から依頼された日本建築学会は、二〇一九年に「UR集合住宅団地・保存活用小委員会」を設置し、その活動は今年度末まで続くのだが、その委員会に各地から保存活用の取組み情報が届いている。例えば、昭和二十三年に建設された旧長崎県営魚の町団地、同じ年の静岡市営羽衣団地、昭和二十八年に建設された旧芦屋市営宮塚町住宅、そして昭和三十四年に建設された福島県営野田町団地といった具合である。

それらは、当時の公営住宅標準設計に基づいて計画、建設されていることが多く、今挙げた四事例に関して言えば、それぞれ西暦下二桁の数字をとって「48型」、「52FC型」、「54C－2型」と呼ばれている。多くの読者には全く馴染みのない呼称かもしれないが、団地通の間ではこの型名だけで、間取りが頭に浮かぶのだから面白い。

待望のサミット

写真をご覧いただきたい。その四事例の担当者と、先述した建築学会の委員会の関係者が、二〇二五年十二月、東京の赤羽にある「URまちとくらしのミュージアム」に集まった。「スターハウス・サミット」と銘打たれたシンポジウムだ。私たち登壇者の背後に浮かんで見えるのは、まさに二〇一九年に登録文化財になった旧UR赤羽台団地のポイント・タワー型の住棟、通称「スターハウス」（右）と板状住棟（左）、その夕暮れ時の姿である。

それぞれの登壇者に勇気を与えたこの文化財住棟群の前で、年季を積んだ住宅を取り壊すことなく、使い続けることになった経緯や、それを実践する上での障壁とその乗り越え方が、明るくまた力強く語り合われた。印象に残ったのは、取り壊すのはもったいないという人々の感覚であり、それがこの担当者たちの背中を押し続けたという事実である。

スターハウス・サミット。2025年12月6日、URまちとくらしのミュージアム。夕暮れ時の登録文化財スターハウスを背景に。（登壇者右から3人目が筆者）

二〇年も前だったらこうはいかなかっただろう。「古い」＝「オンボロ」ということで、議論もなく取り壊されていたに違いない。時代である。

落ち着きのある国

今回のサミットを企画したのは、東京工芸大学の海老澤模奈人教授。ドイツ建築史を専門とされるが、その研究のなかでドイツをはじめとする欧州では、もっと古い集合住宅がごく普通に住み続けられていることを知り、何故日本はそうならないのかという疑問を持たれたのだと言う。

以前私は、二〇一〇年以降の日本は短いサイクルでのスクラップ・アンド・ビルドを繰り返す時期を脱し、欧州の先進国のように建物を長く使い続ける「普通の」「落ち着いた」先進国になるだろうということをあちらこちらに書き散らかした。そして二〇二〇年代、いよいよ私たちの国は普通の落ち着いた先進国になってきたようだ。